

緑地探訪 見晴公園（香雪園）（北海道函館市）

村上健太郎

北海道教育大学函館校 (thelypteris.dentata1973@gmail.com)



写真1 見晴公園のようす



写真2 自生するシダ植物を残す管理が施された斜面

函館市内には、残念ながら2025年10月現在、自然共生サイトとして登録された緑地はありません。ですが、先日、ある函館市役所職員の方とお茶を飲みながら、「函館山緑地や見晴公園（函館市見晴町；写真1）については、将来的に自然共生サイトの候補になりえるよね」という話題になりました。

名前が挙がった二つの緑地のうち、函館山は既に「鳥獣保護区特別保護地区」に指定されており、全国的にもよく知られている緑地です。一方の見晴公園は「知る人ぞ知る」という位置づけで、少なくとも全国的な知名度は高くないかもしれません。

この公園は、明治期に呉服商として成功した実業家・岩船峯次郎が築いた香雪園（旧岩船氏庭園）を中核とする都市公園で、約46haのうち約13haを香雪園が占めています。京都の庭師を招いて造成された庭園は、当初は岩船氏の私邸として維持されていましたが、1950年代に函館市が土地を買収

し、市民が利用できる公園として整備されました。2001年には国の名勝に、2010年には日本造園学会北海道支部の「北の造園遺産」にも指定されています。

公園北側には北西向きの斜面林（二次林）が広がり、コナラ、ミズナラ、ハリギリ、ホオノキなどの巨木が立ち並びます。林床には多様な植物が生育し、この地域本来の自然林の趣を今に伝えていています。頂部の芝生広場から谷底の低平地にある運動場やため池のあるエリアまで20～30mの高低差があり、それぞれは小規模ながら丘陵地に見られる微地形単位²⁾がそろい、谷底面～下部谷壁斜面、尾根部（頂部平坦面・頂部斜面）とでは植生が異なることが実感できます。こうした特徴から、私自身、学生の野外実習にも活用しています。

香雪園として庭園的に整えられたエリアでも、自生する植物を巧みに残すなど、工夫がなされています（写真2）。4月後半～5月初めには、毎年、キクザキイチゲ、エンレイソウ、エゾエンゴサク、カタクリなどの春植物が咲き乱れるほか、スミレ類も多く見られ、これらは、指定管理者である函館市住宅都市施設公社の職員が、園芸だけでなく植物全般に深い知識を持ち、科学的根拠に基づく丁寧な管理を続けてきた結果です。こうした手入れが今後も継承されることが、公園の価値を保つ鍵となるでしょう。動物については、運がよければ林床を走るエゾリスに出会うことがあり、多種の野鳥の観察もできるそうです。訪れるたびに新しい発見があり、自然の営みを間近に感じられる場所です。維管束植物に関する記録は比較的充実していますが、鳥類以外の動物データが少ない点は、今後の調査・研究面での課題といえるでしょう。また、造園学・緑化工学的な視点での研究もまだ多くは行われていないようです。

見晴公園は、函館空港から自動車で約10分という利便性の高い場所にあります。空港周辺でレンタカーを利用する方がプラスワンで訪れる場所としては、案外いい位置にある緑地ではないでしょうか。観光やビジネスなどで、函館市を訪れた方には、ぜひ一度足を運んでいただきたいと思います。

引用文献

- 1) 日本造園学会北海道支部. “北の造園遺産 第5号旧岩船庭園「香雪園」(函館市)”. [https://www.hokkaido.jilazouen.org/gyouji_/kitanozouensisan/kitanozoe_all/5_kousetu/Isan-5\(Kousetsuen\).pdf](https://www.hokkaido.jilazouen.org/gyouji_/kitanozouensisan/kitanozoe_all/5_kousetu/Isan-5(Kousetsuen).pdf) (参照: 2025年11月10日).
- 2) 松井健・武内和彦・田村俊和(1990) 丘陵地の自然環境: その特性と保全, 古今書院.